

「言葉による見方・考え方」を働かせ、深い学びを実現する授業づくりを目指して

## 国語科における深い学び

言語生活の中で言葉を意識し、言葉による見方・考え方を働かせながら、主体的かつ適切に思考・判断・表現していくことで得られる言葉に対する認識の変化。

### 何ができるようになるか

#### 育成すべき「国語」に関する資質・能力

##### 〈自らが身に付けた「国語」を社会や人生で生かそうとする力〉

- 他者のものの見方・考え方を認め、自らのものの見方・考え方を広げたり深めたりしようとする力
  - 伝え合い、相互理解しながら、新たな価値を創造しようとする力（合意形成・対話力）
  - 情報を活用して、考えたり表現したりしようとする力
  - 言語文化に親しみ、尊重しようとする力
  - 言葉の曖昧性を理解した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする力
  - 読書に親しんだり読書をして認識を深めたりしようとする関心・意欲・態度
  - 言葉を適切に用いる素地となる人間性
- 等

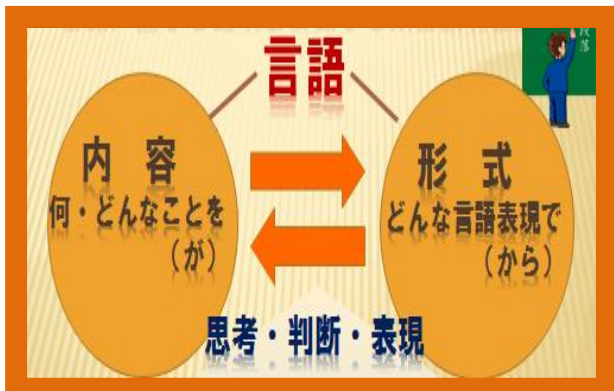
##### 〈生きて働く「国語」に関する知識及び技能〉

- 話し方・聞き方に関する知識や技能
  - 書き方・読み方に関する知識や技能
  - 語彙力（漢字・語句…）
  - 書写技能 文字の知識
  - 国語の特質についての知識（文法・言葉の役割や歴史等）
  - 〈情報スキル〉
  - 情報の収集・整理の知識や技能
- 等

##### 〈未知の状況においても、「国語」を使って適切に思考・判断・表現し、課題を解決したり価値を創造したりする力〉

- 目的に合わせて適切に言語を用いる力
  - 言語を用いた想像力・言語による感性
  - メタ言語能力 ○伝え合う力
  - 論理的な整合性を判断する力
  - 言葉について建設的な批判ができる
  - 言葉についての多角的な思考力
  - 読解力・聴解力
  - 考えを形成し深める力
- 等

### 何を学ぶか



### どのように学ぶか

言葉による見方・考え方を働かせ

#### 言葉に対する思考が 活性化する言語活動

言語に対して深い思考を促す活動

言語を使って深い思考を促す活動

# 「言葉による見方・考え方を働かせ、深い学びを実現する授業づくり」を目指して

## 1 国語科で育成を目指す資質・能力と深い学び

左図は「国語科の本質に迫る授業づくり」の概要を示している。上部は「国語科で育成すべき資質・能力」である。「国語」は「外国語」と同様、互いのコミュニケーションツールであり、これについては学習者も理解しやすい。しかし、重要なのは、無自覚ではあるが「国語」は、日本語を母語とする私たちの人間性の基盤たる「ものの見方・考え方」に大きく関わる「思考」や「感性」をつかさどっているということである。国語科が人間づくりに強く関わるゆえんである。こうした重責を再認識し、学習者が現在や将来において、国語をよりよく用いながら生きていくために必要な資質・能力を育成するための国語科の授業づくりに邁進していきたい。

さて、左図の上部の国語科で育成したい三つの資質・能力、〈自らが身に付けた「国語」を社会や人生で生かそうとする力〉、〈未知の状況においても、「国語」を使って適切に思考・判断・表現し、課題を解決したり価値を創造したりする力〉、〈生きて働く「国語」に関する知識及び技能〉のいずれも、一方的な教え込みでは身に付かない。学習者自身が課題解決的な言語活動に取り組み、その中で言葉に対して言葉を使って主体的に思考・判断・表現をすることでこそ、自分自身の力になっていくものと考えている。知識及び技能に「生きて働く」と冠しているのもこうした意図である。また、このような学習によって得られる学びが深い学びであると考えている。

## 2 「言葉による見方・考え方」について

学習指導要領には、「言葉による見方・考え方を働かせるとは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方などに着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられている」と述べられている。また、「言葉で表される話や文章を、意味や働き、使い方などの言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し、理解したり表現したりすること、また、その理解や表現について、改めて言葉に着目して吟味すること」とも述べられている。つまり、「言葉による見方・考え方を働かせる」とは、言葉への自覚を高めること、言葉の理解と表現、用いられる言葉そのものを学習対象にすることであると言える。では、「言葉による見方・考え方」とは何か。そもそも「言葉によらない見方・考え方」があるのかと問われれば、そのようなものをイメージするのは難しい。ということは、日本語を母語とする私たちはすでに「言葉による見方・考え方」をもっているのが自然である。国語科に与えられた役割は、私たちがすでに持っている「言葉による見方・考え方」を自覚させ、育てていくことと言えるのではないだろうか。実際に授業で具体化していく際には、「言葉による見方・考え方」を明らかにしていく必要があるが、「見方」と「考え方」を区別することは難しい。例えば、文学的文章では、文章中のある言葉に目を付けて、その言葉が「象徴」することや作者による独自の「定義づけ」について指導することがよくある。その際には、その言葉の使われ方を「比較」したり、「類推」したりすることも学習活動に含まれてくる。このような学習活動では、「見方」と「考え方」が複雑に絡み合っており、区別することは難しい。したがって、「言葉による見方・考え方」とは、中教審答申（平成28年12月）で示された「自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けること」として考える。

## 3 「言葉による見方・考え方」を働かせ、深い学びを実現する「問い」

「言葉による見方・考え方」を働かせるためには、適切な言語活動の設定が欠かせない。なぜなら、「言葉による見方・考え方」とは、働かせようと思って働かせるものではなく、課題を解決しようとするときに自然と発揮されるものだからである。また、「接続語」とか「抽象化する」といったような「見方・考え方」を示すことで身に付くものではなく、具体的な言語材料に取り組む中で身に付いていくものだからである。そのため、生徒に学習活動を示す際には、教材との出会いを大切にしたい。その教材から出てくる疑問や感想から課題を設定し、その課題を解決していく過程で「言葉による見方・考え方」を働かせ、資質・能力を身に付けていく学習計画を考えなければならない。教材の選定に当たっては、知的好奇心や感性が揺さぶられるものであることが求められる。実際の授業の課題解決場面は、「言語内容」に当たる部分から徐々に「言語形式」に移っていく。「なぜこの言葉が使われているのですか。」「この表現は〇〇を表すのに効果的ですか。」「このことを伝えるためには、〇〇と△△のどちらがふさわしいですか。」といった問いにより、言語内容と言語形式を往復する思考が生まれ、「言葉による見方・考え方」が働き始める。しかし、この段階で終わっては、せっかく働かせた「言葉による見方・考え方」や身に付いた資質・能力を自覚できず、次の学習で発揮することができない。単元の終わりには、「どのようなことができるようになりましたか。」「次に同じような学習をするときには、どのようなことが使えそうですか。」といった問いかけにより学びを自覚させることで、国語科の学習以外の場面でも汎用的な力として発揮できると考える。

## 実践事例 1

### 第 1 学年「C読むこと」における実践

#### 1 単元名

「くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝」(『竹取物語』より)

#### 2 本校の研究と本実践の関わり

人物像の設定や人物の相互関係に着目し、登場人物の変容や作品の展開を解釈していくことで、古典に親しみ、古典作品をより深く鑑賞することのできる生徒を育成できる。

本単元では「くらもちの皇子」「翁」「かぐや姫」に関する会話文、行動描写、感情表現等に着目して、三者の人物像を明らかにしていく。

昔話としての「かぐや姫」では、登場人物の人物像がよく分かるようには書かれていない。だが、竹から生まれた姫が、翁や貴公子たちの求婚を断り、月に帰っていくという筋書きだけでも、読者にとっては十分にインパクトがある。

しかし、原典である『竹取物語』だからこそ読み取れる登場人物の人物像を知り、人間味あふれる登場人物が互いに影響していることを理解して作品を読むことで、深く鑑賞することができ、作品に対する関心が高まる。

人物像の設定と人物の相互関係に着目することで、登場人物の心情やその変容をより深く理解することができる。また、作品の展開を捉えるうえでも、登場人物の言動が人物像や相互関係に基づいているものだということが分かる。こうした点を踏まえて古典作品を読むことで、より深く作品を鑑賞することにつながる。さらに、作品がより身近に感じられる。それにより、生徒の古典への関心が高まり、古典に親しむ態度の育成につながると考える。

#### 3 実践

##### (1) 単元について

##### ①設定の趣旨

学習指導要領では中学校 3 年間を通して「古典の世界に親しむ」ことが目標とされている。古典に親しむことについて、規工川佑輔 (1991) は「親しむとは文字通り、

いつも接してなじむことである」と述べている。一方、中学校国語科における古典に親しむための指導の問題点を、松本修 (2020) は次のように指摘している。

中学校においては、「親しむ」を素朴概念としての「親しむ」と捉え、高校入試で古典の本格的な問題が出ないことを前提に、音読、暗唱、お遊び的な活動に終始し、かえって古典のおもしろさを全く味わうことの出来ないような学習が横行していることです。(中略)

この問題を解決するには、もう一度、探究的な課題(問い)に基づく言語活動をきちんと古典の学習に位置付けることが必要です。ひらたく言えば、現代文と同じように、ジャンルに応じて、その作品の本質にせまる主体的な学習をデザインすることです。

つまり、中学校の古典指導においては、古典の内容の面白さを知り、古典を読みたいと思う動機付けが必要なのである。

こうした古典指導を行ううえで、入門期である中学 1 年生にとって『竹取物語』は教材的価値が高いと考える。昔話「かぐや姫」は生徒にとっては馴染み深く、作品のあらすじはほとんどの生徒がよく理解している。一方、原典である『竹取物語』を詳しく読んだことのある生徒は少ない。そのため、『竹取物語』を読むことで、生徒は昔話「かぐや姫」にはなかった場面や複雑で繊細な人物描写等があることに気付く。特に、親子の情や人を恋う気持ち、手に入れたいものためには手段を選ばない非情さ等、『竹取物語』からは豊かな人間味を感じ取ることができ、それらは中学生にとっても面白いものである。昔話として知っているので抵抗が少ない状態で読み始めることができ、細かく読んでいくうちに新たな気付きが次々と生まれることが、生徒の関心の高まりにつながると考えた。

また、『竹取物語』の中でも、特に「くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝」の場面は、教材としての内容的価値が高いと判断した。理由は、以下の 3 点である。

- i 山場にどんでん返しがあり、展開が劇的である。
- ii 皇子をはじめとして人物像がよく分かる描写が多く描かれており、それぞれに人間味の豊かさを感じ

じられる。

- iii 登場人物の思惑が交錯し、互いに影響し合っていることが分かりやすい。

この場面では、姫と結婚したい皇子と、皇子と結婚したくない姫との駆け引きが描かれている。また、翁は姫を裕福な貴族と結婚させたいと考えている。これは娘のように育ててきた姫に幸せになってほしいという親心とともに、翁自身の欲もあったのではないかといわれており、翁の皇子に取り入ろうとする姿が描かれている。姫は大切な翁の手前、皇子を無下に断ることもできず、策略に長けた皇子の用意周到さや過剰な演出、大げさな物言いにより、姫にとって不利な状況が徐々に生まれてしまう。こうした互いの思惑が交錯する中、緊張感のある展開が生まれるからこそ、皇子の雇った職人により真相が明らかになる場面がより劇的になり、爽快感が高まるのである。また、皇子の形勢が不利になると、急に寝たふりを決め込む翁の姿は、道化的で滑稽である。

このように、登場人物の人物像を明らかにし、人物が互いにどう影響し合っているかに着目することで、作品の理解はより深まる。

また、生徒が文学作品を面白いと捉えるのは、本来、感覚的な活動である。それを、分析し、他者に分かるように説明するためには、作品を対象化し、読み深めていく必要がある。文章全体を踏まえ、物語の展開や人物の変容などに関して、細部の内容や表現の意味や働きを捉えていくのである。また、複数の部分がつながることで、作品全体に対してどのような意味が生まれるのかを明らかにしていくのである。

そのためには、生徒に「くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝」全体を読ませる必要がある。しかし、教科書では一部だけを古文として取り上げ、その他の部分はあらすじだけを載せている場合が多い。これでは、細部の意味や働きに生徒は気付くことはできない。そこで、本実践では、「くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝」に関する部分を、全て現代語訳でテキスト化し、生徒に提示することとする。教材として利用するのは角川書店『ビギナーズ・クラシックス 竹取物語（全）』である。大胆な意訳がなく、原典に忠実に且つ適度に注釈を補いつつ日常

の言葉で語られているため、生徒にとっては分かりやすくありながら、原典本来の内容と大きく反れないため、古典学習入門期にふさわしいと考えた。

以上のような学習を通し、生徒に文学作品をより深く鑑賞する力を身に付けさせるとともに、古典に親しむきっかけとしたい。

## ②単元の目標

- 音読に必要な文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読し、古典独特のリズムを通して、古典の世界に親しむことができる。【知識及び技能】
- 場面の展開や登場人物の相互関係、心情の変化などについて、描写を基に捉えることができる。【思考力・判断力・表現力等】
- 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。【学びに向かう力、人間性等】

## (2) 単元全体の流れ（全8時間）

第1次 冒頭を読み、全体のあらすじを知る。

- ・ 冒頭を音読し、歴史的仮名遣いや古文独特の言葉の読みに慣れ、内容をつかむ。……………1時間
- ・ 古文と現代語訳を参考に全体の大まかなあらすじをつかむ。……………1時間

第2次 「くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝」を読む。

- ・ 現代語で「くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝」を読み、物語の設定を確かめ、場面ごとのあらすじを捉える。……………1時間
- ・ 「くらもちの皇子」「翁」「かぐや姫」それぞれの人物像と人物の相互関係を捉える。……………2時間
- ・ 「くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝」の物語としての面白さについて話し合う。……………1時間

第3次 「かぐや姫の昇天」を読む。

- ・ 天人との比較からかぐや姫の心情を捉える。……………1時間
- ・ 古典に描かれた人間の心のありようについて考える。……………1時間

### (3) 授業の実際

**第6時** 本時の学習課題を「何が『くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝』を面白くしているのだろうか」とし、人物像の設定や人物の相互関係が作品にどう影響しているかを話し合わせることを通して、山場を劇的にするための展開の工夫を捉えさせることができると考えた。

まず、この部分を読み、どんな点が面白いと感じたか、生徒に尋ねた。生徒からはどんでん返しのある物語の展開に関する意見が多く聞かれた。

- ・ 結婚できそうだと得意になる皇子と負けそうで打ちひしがれる姫の立場が山場を境に逆転しているところ。
- ・ 形勢が逆転した後は、姫が一気に強気になって皇子に冷ややかな皮肉を込めた歌を送り、皇子は恥ずかしくて逃げ出すところ。

また、姫、翁、皇子は結婚に思惑上のずれがあり、それが面白さに影響していると生徒は考えた。

- ・ 名声のために「結婚したい」皇子と姫のために「結婚させたい」翁、自分のために「結婚したくない」姫の3人の思惑が絡み合い、ぶつかり合っているところ。

また、物語の構成上、皇子の真相は事前に書かれており、皇子の言い分が嘘だということを読者は知ったうえで読んでいく。それにより、次のような面白さが生まれるという意見もあった。

- ・ 嘘を見事に信じ込んで、すっかり結婚させる気になっている翁が滑稽に見える。
- ・ 姫が嘘を信じ込み、落ち込んだり、悔しがったりするとハラハラする。
- ・ 嘘なのに、さも真実であるかのように語る皇子がずる賢く見える。

そのうえで、「人物像の設定」「人物の相互関係」「物語の展開」がどう影響し合っているといえるかを考えさせた。生徒からは以下のような意見が挙がった。

- ・ 皇子が、自信家で計画の完璧な人物として描かれている。姫にとってはかなりの強敵として描かれている。だからこそ、姫は圧倒的に不利な状況から危

機を脱したことになるため、山場のどんでん返しが劇的な印象になる。

- ・ 皇子には、ずる賢い悪人という人物像が感じられる。そのため、そんな皇子が最後には身を滅ぼすことで、勧善懲悪的な爽快感を読者は感じる。
- ・ 作品全体の序盤に比べ、この場面での姫は感情豊かになっている。だからこそ、皇子の嘘を信じた際に、本気で悔しがり、負けそうになり焦る様子が見られる。姫が人間的になっていくことは、読者にとっては嬉しいことである。そんな姫が皇子にだまされそうになるからこそ、読者は姫に共感的になってしまう。だからこそ、姫が真実を知ったときの晴れやかな喜びようが印象的になり、読者も一緒になって喜びを感じられる。

その後、この部分の面白さを、生徒各自に自分の言葉でまとめさせた。

- ・ 皇子を賢く、計画性の高い人物として書きつつ、翁や姫がすっかりだまされている様子を書くことで、嘘を真実により近づけ、山場で嘘がばれたときの落差を際立たせ、どんでん返しの面白さを生みだしている。
- ・ したたかな計略家という皇子と、賢くプライドの高い姫の設定が、だまし合いの緊張感を高めるとともに、姫の勝利という逆転劇に爽快感をもたらしている。

「人物像の設定」「人物の相互関係」「物語の展開」に着目し、それらがどう影響し合っているかを考えることで、生徒はこの場面の面白さへの理解を深めていった。

## 4 成果と課題

### (1) 「深い学び」を実現する単元構成

導入段階から、古典に対して抵抗感をもつ生徒は少なくない。長い古文であればなおさらである。そのため、本単元では、現代語訳を教材化した。そのうえで、松本の言う「現代文と同じよう」な、「作品の本質にせまる主体的な学習」を目指した。

現代語訳を用いたことに対しては、多くの生徒にとって好評だった。単元の振り返りから、感想の例を以下に載せる。

- ・ 古典は何が書いてあるかわからないからつまらないと思っていたが、意味を理解すると面白いものもあった。特に、心情の変化がよく分かった。
- ・ 昔の人が考えた話なのに、現代の小説ぐらい深く、面白い。だから、読みごたえがあった。
- ・ いろいろな人物が登場し、その一人一人が違う性格だったから、よく作られている作品だと思った。

古語につまずかずに、生徒が作品を味わえたことが分かる。古典では、言葉だけでなく、慣習や価値観の面でも現代との違いが見られる。そうした違いを面白いと感じ、当時の人々の考えや生活に思いをはせるうえで、言語抵抗としての古語を排除することは有効であったと考える。また、昔話としてある程度知っている内容だからこそ、学習に入りやすかったという面もあったと推測できる。

また、単元の振り返りの中で、生徒が作品を面白いと感じた理由を書かせたところ、次のような意見が見られた。登場人物の人物像に関する記述に一重線、登場人物の相互関係に関する記述に二重線、生徒自身の物語に対する感想に関する記述に波線を引いた。

- ・ くらもちの皇子はかなりの策略家で、嘘の冒険譚をリアルに語るために、何年もかけていることが分かった。そして、その嘘を翁やかぐや姫が本当に信じていて、簡単にばれたのではないことも分かった。かぐや姫は真剣に結婚しなければならないと思いを悩んでいてかわいそうだと思ったので、あらすじを読む前より、皇子はさらにひどい人物だと思った。だから、嘘がばれて、姫が喜び、皇子が逃げ出すところは自分もすっきりして楽しい。
- ・ 翁が皇子に協力的で、姫に嫌なことを無理強いさせているような感じがして、姫がかわいそうだった。でも、翁としては姫が大事だから結婚してほし

いという気持ちもあるのだという意見を聞いて、翁は翁で一生懸命なのかなと思った。だから、そういう複雑な感情のすれ違いは読者だけが知っていて、いろいろと想像しながら読めるから、そこが面白いところだと思う。(下線は授業者)

生徒の感想からも、本実践のような過程をとることで、生徒が「人物像」「人物の相互関係」という見方・考え方を働かせながら、自分がどうして面白いと感じたかを論理的に説明できていることが分かる。

以上のように、作品の細部の叙述を組み合わせ、言葉による見方・考え方を働かせ、作品の面白さを分析していく学習は、生徒が古典学習における「深い学び」を実現するうえで効果的であった。

## (2) 「見方・考え方」を働かせる「問い」

第6時の話合いの様子を例に挙げる。

- T1：何が「くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝」の物語を面白くしているのですか。
- S1：翁は姫のことを大事に思っているからこそ、結婚させたいが、姫は結婚したくないと思っているところ。翁は調子よく、皇子に便乗している。
- S2：姫は育ててもらった恩もあるし、翁の気持ちには応えたいのだろうけれど、自分は月に帰ってしまうから結婚できないのに、それをわがままだと思われている。
- S3：姫にとってはもどかしい気持ち。2人の気持ちがかみあっていない。
- T2：それが読者にとってどういう面白さにつながるのですか。
- S4：翁も姫もそれぞれの気持ちは知らなくて、読者だけが知っているから、あーすれ違ってる、もどかしいって感じる。
- S5：それから翁に対して、姫の気持ちを分かってくれてよという気持ちになります。
- T3：つまり、どういうこと？

S 6 : 読者は「神」なんですよ。だから、物語の外側から、翁や姫や、その他いろいろな人がすることを「愚かだな」とか「やめておけばいいのに」という気持ちで見ることができると思います。

S 7 : 気持ちだけじゃなくて、この後の展開も私たち読者だけは真実を知っているから登場人物に感情移入できたり、ハラハラしたり、もどかしいなと思ったりするのではないかな。

S 8 : 私は、どうせこのあと嘘がばれるのに、純粹に信じちゃってる翁は間抜けだなと思いながら読んでいました。

S 9 : 姫も翁や皇子に対していろいろ悩んで、最悪な気分になり落ち込んで。それを知っているから、最後に嘘がばれて、全部ひっくり返るところで、自分も姫と同じように「やったー、うれしい」という気持ちになるんですよ。それで、すかっとする。

T 1 の時点で「何が」と問うことにより、個々の叙述の内容や表現に生徒は着目した。「人物像の設定」や「人物の相互関係」「物語の展開（山場、どんでん返し）」については既に学習を行っているため、それらの視点から個々の叙述や叙述どうしのつながりを価値づけた発言が見られた。

しかし、この時点では、「作品の中で生徒自身が面白いと感じたところ」を述べているだけで、読者に対し、どのような効果があるかは述べられていない。

そこで、T 2 で「読者」「どういう面白さ」という言葉で問いかけることにより、生徒の挙げた部分が読者にとってどう感じるものであるかをより詳しく話合わせることにつながった。それにより、「面白い」から、「もどかしい」「すかっとする」などの感想へと深まり、生徒の捉えをさらに深めることにつながった。

### (3) 今後の課題

本単元のねらい上、現代語訳を教材として扱ったものの、生徒の発達段階や能力に応じ、古文である原典を取り扱う場面があってもよかったのではないかと考える。

古典特有のリズムや現代語では表しきれない微妙な語感の違いなどに触れることができるからである。

さらに、単元の振り返りから、「人物像」「人物の相互関係」という見方・考え方を働かせながら、自分がどうして作品を面白いと感じたかを論理的に説明しようとする生徒の姿を捉えることができた。この既習経験を生かし、今後は、古典作品だけでなく、文学作品の鑑賞において、「何が作品を面白くさせているのか」「面白くとは具体的にどういうことなのか」を生徒に言葉で説明させる場面を設けていきたい。そのためには、鑑賞するうえで大切となる言葉による見方・考え方を授業者自身が整理し、作品のどの場面での見方・考え方を働かせることが効果的なのか、単元攻勢を工夫していく必要がある。

### 【参考文献】

- ・『新編日本古典文学全集 12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』小学館 1994
- ・『ビギナーズ・クラシックス 竹取物語 (全)』角川書店 2001
- ・規工川佑輔『魅力ある古典の指導入門』明治図書 1991
- ・松本修・桃原千英子編著『中学校・高等学校国語科 その問いは、文学の授業をデザインする』明治図書 2020
- ・小林康宏『中学校国語問題解決型国語学習を実現する「見方・考え方」スイッチ発問』東洋館出版 2022

(授業者 丹保 芽久美)

## 実践事例2

### 第3学年「C読むこと」における実践

#### 1 単元名

『万葉・古今・新古今』

#### 2 本校の研究と本実践の関わり

同一素材の和歌を比較する学習によって、それぞれの和歌集の特徴を捉えたり、古人のものの見方、感じ方を捉えたりすることができる。

本単元における深い学びの状態とは、複数の和歌をいくつかの観点で読み比べることを通して、それぞれの和歌の共通点や相違点を見つけ、三大和歌集の特徴に気づき、和歌集の特徴を根拠とともに語れる状態のことをいう。つまり、和歌に詠まれる情景や心情を理解し、根拠をもって自分の考えを述べられるようになることを目標とする。

#### 3 実践

##### (1) 単元について

##### ①設定の趣旨

和歌は五音・七音を基調とした定型詩である。その洗練された言葉遣いにふれることで、古文が現在の日本語につながっていることが分かる。また、昔の人々のものの見方や考え方が今を生きる私たちにも共感できる部分が多いことも読み取ることができる。

「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」の三大和歌集は、奈良、平安、鎌倉のそれぞれの時代の優れた歌集として名高い。庶民から貴族まで、様々な歌人が、限られた字数の中に巧みな表現で、その瞬間に感じた心情や趣を見事に詠み込んでいる。「万葉集」は、素直でおおらかに歌いあげたものが多く、「古今和歌集」は、機知に富んだ表現で優しく細やかに歌われている。一方、「新古今和歌集」は、華やかで技巧に優れたものとしめやかで内省的なものが混在しているなど、それぞれの歌集には特徴がある。細かな表現に着目し、作者や歴史的背景等、多様な角度から和歌を読むことで、和歌の味わいや趣を感じることができる。また、本教材中の和歌は、古人が創作したものではあるが、心動かされたその瞬間や思

いを形にしたり、誰かに伝えたりしたい、という現代に繋がる人間の感情が根底にある。表現の形は変われども変わらない感性や情緒を大切にしながらも、古人が過ごした時代に思いを馳せ、伝統文化特有の素晴らしさを感じとることは重要な学びとなる。

本単元では、歌集別での和歌の比較を行うことで、各和歌集の歌風や特徴をつかむことをねらいとする。

歌集の総体的な歌風や特徴の変遷をつかむことは、生徒にとって詩歌を多面的に捉えることにつながる。直情的で素朴なものから抒情的で技巧的なものに変化していく過程を捉えることで、生徒は各歌集にはそれぞれの良さがあることに気づき、それを区別して味わえるようになる。

しかし、教科書の掲載歌は互に関連性のないものが多いため、複数の歌を関連させ、歌集ごとに歌風や特徴を明らかにすることは難しい。一方、生徒が持っている資料集等には各歌集の歌風や特徴が説明されている。万葉集は「感動がそのままに表現されている」、古今和歌集は「理知的である」、新古今和歌集は「難解で想像の世界ある」というものである。しかし、こうした特徴を、生徒は実感を伴って受け止められていない。

そこで、本単元では、同一素材を扱った和歌を各歌集2首ずつ取り上げ、比較する。

和歌の素材としては「梅」を取り上げることにした。「梅」は生徒にとって馴染み深い素材である。また、各歌集において掲載歌数が多く、比較検討を行うのに適している。「万葉集」では、春の訪れを感じる対象として梅の和歌が多く詠まれた。「古今和歌集」では、見た目の様子だけでなく、香りについて詠まれる歌が増えた。「新古今和歌集」では梅の香りが昔を思い出させるものとして扱われるなど、目の前にない梅を詠む歌が登場する。こうした和歌の素材としての「梅」の捉え方の変遷は、和歌集の総体的な歌風の変遷に通じるものであると考えた。そのため、梅を素材とした和歌を読み比べることで、和歌集の特徴の違いを捉えることができると考えた。

教材として取り上げる和歌は以下の通りである。各歌集より2首ずつ提示した。万葉集歌を【万〇】、古今和歌集歌を【古〇】、新古今和歌集を【新〇】と表した。また、



各歌をA・Bの2群に分けた。A群は梅自体が主題となっている歌、B群は歌の中に梅を取り入れて恋愛の情を詠んだ歌となっている。教材化するにあたり、テキストには現代語訳も付けた。(現代語訳は「日本古典文学全集」(小学館)による。)

【万A】 去年の春いこじて植ゑし我がやどの若木の  
梅は花咲きにけり 阿部広庭 (万葉 1423)

【万B】 我が背子に見せむと思ひし梅の花それとも  
見えず雪の降れば 山部赤人 (万葉 1426)

【古A】 梅の花にほふ春べはくらぶ山閨にこゆれど  
しるくぞありける 紀貫之 (古今 39)

【古B】 君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも  
しる人ぞしる 紀友則 (古今 38)

【新A】 梅の花あかぬ色香も昔にて同じ形見の春の  
夜の月 皇太后宮大夫俊成女 (新古今 47)

【新B】 梅の花匂ひをうつす袖のうへに軒漏る月の  
かげぞあらそふ 藤原定家 (新古今 44)

また、鑑賞にあたり、次の観点を生徒に提示した。

- 1 和歌における梅の働き
- 2 和歌に用いられている表現技法
- 3 和歌に詠まれている情景
- 4 和歌に詠まれている心情

これらの観点を提示することで、生徒はそれぞれの和歌に違いがあることに気付くとともに、和歌の鑑賞の方法を学ぶことができると考えた。また、複数の観点を結び付けながら比較することを通して、より明確な根拠をもって特徴の違いを考えさせることを目指す。

## ②単元の目標

- 歴史的背景などに注意して古典を読むことを通して、その世界に親しむことができる。(知識及び技能)
- 表現の仕方や言葉を吟味して、和歌に表れた心情や情景を捉えることができる。  
(思考力・判断力・表現力等)
- 言葉がもつ価値に気付くとともに、進んで読書をし、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。(学びに向かう力、人間性等)

## (2) 単元全体の流れ (全6時間)

第1次 三大和歌集について知り、教材歌を読み、内容を把握する。

- ・ 「古今和歌集」仮名序を読み、当時の人々の和歌の捉え方を知る。……………1時間

- ・ 「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」の和歌を読み、和歌のリズムや表現技法を捉える。……………2時間

第2次 教材歌の比較を通して、三大和歌集の特徴を捉える。

- ・ A群の3首を比較し、特徴の違いを捉える。……………1時間

- ・ B群の3首を比較し、特徴の違いを捉える。……………1時間

- ・ 6首を総合し、歌集ごとの傾向をまとめ、自分の言葉で表す。……………1時間

## (3) 授業の実際

**第4時** 本時の学習では、A群の3首を比較し、特徴の違いについて話し合わせた。各歌を前述の鑑賞の観点に沿って比較させた。次は、生徒の気付きの一部である。

### 【和歌に用いられている表現技法】

- ・ 【万A】は技巧的な表現は用いられていない。【古A】は係り結びにより、梅の香りが強調されている。

- ・ 【新A】は体言止めを用いることで、美しい情景が印象に残る。

### 【和歌に詠まれている情景】

- ・ 【万A】では率直に梅の花そのものが描かれている。それに対し、【古A】では、梅の香りを感じたことで、梅が咲いた様子を想像したことが詠まれている。作者の目の前に梅そのものはないことが分かる。【新A】では、梅と月の取り合わせが描かれている。この二つの景物が掛け合わさることで昔を思い出させるきっかけとなっていることが分かる。

### 【和歌に詠まれている心情】

- ・ 【万A】は、去年植えた梅の花が咲いたことへの喜びの気持ちが伝わってくる。【新A】は、昔を懐かしむ気持ちが詠まれている。

鑑賞の観点に着目させることで、各歌の違いをより明

確に読み取らせることができた。

**第5時** 鑑賞の観点の踏まえ、B群の3首を比較させた。  
次は生徒の意見の一部である。

**【和歌における梅の働き】**

- ・ B群の3首とも、梅が恋しい相手のことを思い起こさせている点では一致している。
- ・ 【万B】では、梅は感動の中心である。【古B】は恋しい相手に相手自身の素晴らしさを述べるための道具として梅が扱われている。また、【新A】と同様、【新B】は梅と月の取り合わせが詠まれており、幻想的な雰囲気を作り出している。

**【和歌に詠まれている心情】**

- ・ 梅を好きな相手に見せたいという思いはB群の3首ともに共通している。
- ・ 【万B】では、梅自体が素敵なものであるがゆえに、好きな相手にそれを見せたいという思いが伝わってくる。【古B】は、【万B】ほど、梅自体に関心があるわけではなく、相手を持ち上げたいという思いが中心である。【新B】では、袖に月が映るという描写から、その袖が涙で濡れていると解釈できるため、一人で涙を流す様子から恋愛を想起させるという難解な歌である。作者の思いははっきりと分からないからこそ、幻想的な梅と月の取り合わせから、作者のどんな思いが描かれているのかを自由に想像することができる。

「梅」自体を賛美することだけを表現した歌でなく、恋歌であっても、梅について率直に描かれていることが分かる「万葉集」、梅自体が感動の主体からは外れている「古今和歌集」、幻想的で難解な世界を描くことで、様々な解釈が可能となる「新古今和歌集」といった違いを、生徒は理解していった。

**第6時** 同一歌集でA・B群の比較を行い、共通点を挙げたうえで、各歌集の梅歌がどのように変化しているか、まとめさせた。次は生徒の意見の一部である。

- ・ 「万葉集」では梅自体が感動の中心となっている

が、「古今和歌集」や「新古今和歌集」では別の思いを表現するために梅が扱われている。

- ・ 「万葉集」では目の前にある梅、「古今和歌集」では離れた場所にある梅、「新古今和歌集」では過去の記憶の中もしくは想像上の梅が描かれている。徐々に、目の前の現実の情景から、作者の頭の中の情景へと変わっていることが分かる。
- ・ 「万葉集」では梅と雪の対比が詠まれ、「新古今和歌集」では梅と月の対比が詠まれている。梅と別の景物の取り合わせが描かれている点では一致しているものの、「万葉集」では冬と春の景物が同居する驚きをストレートに描いているのに対し、「新古今和歌集」では視覚と嗅覚による幻想的な情景を描いているという点で意味合いが異なる。

このような歌の捉えは、各歌集の特徴と一致している。

#### 4 成果と課題

##### (1) 「深い学び」を実現する単元構成

第6時で生徒が書いたまとめを示す。

- ・ 「万葉集」での梅は、実物が描かれていて、梅を主役にしてしている。「万葉集」は直接的な表現が多いので、梅も見たままの状態を描かれ、「見せることができず残念だ」という気持ちがよりストレートに伝わってくる。

「古今和歌集」では、自分の気持ちを伝えるツールとして梅が使われていて、梅が歌の中心ではない。恋しい相手を褒め称える思いを「梅の花色をも香をもしる人ぞしる」と、梅を使って遠回しに表現している。

「新古今和歌集」の和歌は、梅を過去の出来事や別の物語を想起させる存在として描いている。想像したり、他の知識と組み合わせたりしないと分からない難解な和歌である。

- ・ 「万葉集」の和歌からは、「好きな人に梅の花が見せられず残念だ」という思いや「雪のせいで」と恨めしく思う気持ちが、まっすぐに伝わってきた。難しい表現が使われていなかったからこそ、純朴な思

いが伝わるのだと思う。

「古今和歌集」では、相手に好意を伝える手段通して梅が使われていると考えた。「しる人ぞしる」から、相手のことを「あなたは梅の良さを理解する素晴らしい人」とほめて、遠回しに好意を伝えるところが理知的なのかなと思った。

「新古今和歌集」の和歌は、実体験ではなく物語の世界を詠んでいるから、情景が美しく描かれている。梅の香りが漂い、軒の隙間から月の光が漏れている中、涙を流す男が立っている姿は、一枚の絵画のようだったと思った。

これらの感想から、生徒が、便覧に書かれている各歌集の特徴を概念的に理解するのではなく、各歌の鑑賞を通し、具体的な実感を伴って理解していることが分かる。

共通した題材の和歌を比較し、鑑賞を深める単元構成は、生徒が古人の感性に触れ、各歌集の特徴をつかむうえで効果的であったと考える。

## (2) 「見方・考え方」を働かせる「問い」

第6時では、「三大和歌集の特徴は、梅歌の中にどのように表れているだろうか」という問いを投げかけた。以下はそのときの話し合いの様子である。

T1：それぞれの和歌で「梅」はどのような役割をもっている？

S1：【万B】の梅は相手に見せたい対象、【古B】は思いを共有するための道具、【新B】は自分の中の思い出をよみがえらせるものとして描かれていると思った。

S2：最初はただの物体だったものが、二人をつなぐもの、自分の思い出をよみがえらせるものになっていっているよね。【新B】の梅は相手を象徴しているって言えばいいのかな。

S3：梅が意味するものがだんだん抽象的になっている感じ。梅に与えられた役割が複雑になっているのが分かる。

T2：それぞれの和歌に表れている心情は違う？

S4：【万B】と【古A】はどちらも「梅を見せたい」

という思いは共通している。

T3：二つの「見せたい」はどう違うの？

S5：【万B】はただ「見せむ」、【古B】は「誰にか見せむ」で「誰に見せようか、いやあなただけ」って反語になっている。素直に「あなたと見たい」って言えばいいのに、なんか回りくどいよね。

T4：【万B】は直接「見せたかったのに」って思いが書かれているけど、【古B】は本心が書かれていないんだね。じゃあ【古B】で伝えたい気持ちは？

S6：【古B】はあなたは素敵だ、好きだという気持ちを伝えたい。

S7：【古B】は、過去に梅の花についてやりとりしたことがあるんじゃないかな。相手の好みを尊重して贈っている。相手のことを考えている感じがする。

T5：相手を喜ばせたいという気持ち？

S8：うん。で、あわよくば自分の思いも伝われば…みたいな。やっぱり、何か裏があると思う。回りくどい。

T6：今話した内容は、便覧で確認した特徴や歌風に当てはまる？

S9：万葉集の「直接的」っていう特徴は、気持ちがストレートに伝わってくる場所に当てはまると思う。

S10：古今和歌集の「曲線的」っていうのは、万葉集と比べると回りくどいとか、遠回しだっていうところから分かる。

S11：「たをやめぶり」も、直接気持ちを伝えないというところで【古A】に当てはまっている感じがする。

S12：新古今和歌集の「実感から遠ざかって難解な歌」は、まさにその通りって感じ。知識や教養がないと分からないだろうし、梅も実物じゃなくて、過去の恋人を表しているところとか。

T1では、「役割」という言葉を用いて問うた。それにより、同じ梅を扱った歌でも、梅自体が感動の主体となっているものや、梅が別の何かを表すための材料となっているものなどがあることに気付いていった。こうした

問いにより、和歌における題材や材料の価値について、生徒は考えを深めることができたといえる。

また、T6では、生徒の考えと便覧の記述を比較する問いを發した。歌集の歌風について、教材の説明を読めば、生徒は分かったつもりになってしまう。しかし、それだけでは本当に歌風の違いを理解したことにはならない。実感を伴った理解が必要なのである。そのため、こうした問いにより、「直線的」か「曲線的」か、「ストレート」か「難解」かといった点について、具体的にそれがどういうことなのか、理解を深めさせることができたものとする。

### (3) 今後の課題

本単元では、6首の同一素材の和歌を比較することによって、三大和歌集の特徴や歌風を捉える学習を行った。こうした教材開発のうえでは和歌の精選が重要となる。本単元では、便覧にある和歌集の特徴を梅の和歌に当てはめて考えるという演繹的な方法をとった。その際、それぞれの和歌が特徴や歌風に沿っているものとなるよう、より吟味していかなければならないと感じた。

その一方で、個々の和歌がもつ表現の豊かさを一つの枠に当てはめてしまうことがないよう、また、歌風にはまらない表現や和歌があることも理解したうえで、和歌に親しませる授業を行っていききたい。

#### 【参考文献】

- ・小林康宏『中学校国語問題解決型国語学習を実現する「見方・考え方」スイッチ発問』 東洋館出版 2022
- ・小林康宏『中学校国語 思考モデル×観点で論理的に読む 文学教材の単元デザイン』 東洋館出版 2023

(授業者：山室 美緒)